



「維新未来博」
作文コンクール

明治維新150周年を契機に、郷土の先人たちの偉業や郷土の歩みを学び、その時代に思いを馳せることを通じて、郷土への理解や愛着を深め、今後の自らの将来の姿、鹿児島が進むべき方向性や未来などを考えるきっかけとするために行われました。

○テーマ

小学生の部「私が尊敬する郷土の先人」

中学生の部「後世に伝えたい幕末・維新期の郷土の先人」

【小学生の部】 応募総数：119校 1,067作品

【中学生の部】 応募総数：44校 354作品

最優秀賞 喜界町立早町小学校 6年
中村 陽菜
「人を育てる力」

最優秀賞 奄美市立名瀬中学校 1年
赤井 洸太
「現代から見た西郷さん」

優秀賞 鹿児島市立田上小学校 5年
稲田 祐子
「薩摩おごじょ天璋院篤姫」

優秀賞 志布志市立伊崎田中学校 2年
野村 大和
「先人たちの歴史」

優秀賞 薩摩川内市立里小学校 6年
山下 煌生
「ぼくの維新プロジェクト」

優秀賞 始良市立重富中学校 3年
藤崎 琴子
「『西郷どん』に学ぶ」

「維新未来博」 テーマ研究発表

高校生が、明治維新时期の郷土の歴史や先人たちの生き方を「若者らしい新たな視点」をもって、自発的・能動的に学び、調べ、発表することを通じ、郷土に対する理解や愛着を深め、それらを後世に継承するため、そして鹿児島県の将来を支える人材を育成するために行われました。

最優秀賞

古仁屋高等学校
濱田 怜弥
岩木 乙香
奥村 芽生
福沢 あさひ

日本スイーツの聖地
～よみがえる奄美大島白糖製造工場～

優秀賞

大口高等学校
前原 亜弥香
山下 紗矢
瓦 渚沙
黒木 千春

曾木の滝と明治維新
～伊佐地方の川内川開発による
殖産興業政策について～

優秀賞

沖永良部高等学校
内山 希生
久松 紀代夏
宮元 美法

「西郷どん」体験in沖永良部

かごしま政策アイデア コンテスト

地域経済分析システムRESAS（リーサス）等の利活用を図るとともに、データに基づき地域の課題を分析できる人材の育成につなげるため、高校生及び大学生等を対象に、政策アイデアを募集したもので、明治維新150周年となる今年度、新たに実施しました。

【高校生の部】

大賞

本郷高等学校（東京都）
「鹿児島応援隊」
西山 知樹
岩崎 正太郎
塩谷 航平

大隅半島観光客誘致計画

優秀賞

鹿屋養護学校
「チームふたば」
前田 武蔵
岩元 章馬

鹿児島県の観光客を増やすための政策
～可もなく不可もないかごしま～

奨励賞

川内商工高等学校
「チームTUK2」
高木 梨乃
上野 恵里花
上城 未暉
児玉 すみれ

薩摩川内市と霧島市の比較から見えること
～観光による薩摩川内市チャレンジ大作戦！～

【大学生の部】

大賞

鹿児島大学法文学部経済情報学科
「法文学部澤田ゼミ」
松田 優太郎
緒方 啓人
黒田 怜佐

The Cashless Island

優秀賞

鹿児島大学法文学部法経社会学科
「徳之島元気づけ隊」
横道 うらら
西木場 綾香
木村 尚香

子宝の島「徳之島」をにぎやかに！
～“移住生活支援×助け合いの心”
が繋ぐ人々の輪～

奨励賞

鹿児島大学法文学部・農学部
「りっちゃんとのんちゃん」
野崎 翔太
高本 梨花

最先端×最先端,
町に若返りの夕ネをまく
～第二のふるさとを救う
クリエイターが集うラボ～



最
優
秀
賞



喜界町立 早町小学校 六年

中村 陽菜

「人を育てる力」

郷土鹿児島の人と言え、西郷隆盛、大久保利通といった名が真っ先に出てくるが、私の一押しは何と云っても島津斉彬だ。

反射炉や溶鋳炉の建設、薩摩切子の製造など、伝統や文化を大切にしつつ、西洋の技術と文化を取り入れようとしたところは、なんて国際感覚の高い人だったのだろうと思う。

しかし、島津斉彬の最もすごいところは、たとえ下級武士でも、優秀であれば重要な役に取り上げたり、思いや考えに耳をかたむけたりしたことだと私は思う。

才能よりも家がらが重視されたあの時代に、斉彬が藩主にならなければ、きっと西郷隆盛も大久保利通も下級武士のまま、明治維新の立役者になることはなかったのではないか。

斉彬のそういった「人を見る力」や「人の思いや考えを受け止める力」に、私は強いあこがれをもった。

私の学校にも、子どもの良さを認め、活やくの場をあたえてくれる先生がいる。私が所属している委員会の担当の先生は、私が何か一つ活動の提案をすると、

「そのアイデア、とてもいいね。みんなもきっと興味を持ってくれるはずだよ。」

と賛成してくれ、ときにはアドバイスもしてくれる。そして、やりとげた時は必ず、

「とっても良かったよ。完ぺき。」

と笑顔でグッジョブサイン。

おかげで私の委員会の活動はいつも活気がある。自分たちの思いや考えを受け止め、信じて任せてくれた上、最後はしっかりほめてもらえるのだ。やる気の出ないはずがない。

きっと西郷隆盛や大久保利通も同じような気持ちだったにちがいない。だからこそ、命をかけ、新しい日本のためにがんばることができたのだろう。そう考えると、斉彬は「名君」というだけでなく、「教育者」でもあったのだろうと私は思う。

私の将来の夢は、小学校の先生だ。私には理想の先生像が二つある。

一つは、子どもの才能や良いところを見つけ、ほめてあげられる先生だ。ほめてあげることで子どものやる気を引き出すことのできる先生になりたい。

もう一つは、子どもたちの思いや考えをよく聞き、受け止め、子どものがんばりや成功を信じて任せてあげることのできる先生だ。

正直、斉彬や委員会の担当の先生のように、その人の才能や良さを見出し、信じ、任せることは難しいことだと思う。しかし、斉彬の行ったことを知り、その先生の姿を見る中で、人を育てる人を目指すならば、「人を見る力」や「人の思いや考えを受け止める力」は大切なのではないかと私は考えている。

そのために私は、日々の中で、周りの人たちを大切に、多くの人と接する中で、そういった「人を育てる力」を身につけた小学校の先生になれるように生活していきたい。



鹿児島市立 田上小学校 五年

稲田 祐子

「薩摩おごじょ

天璋院篤姫」

田上小には、西郷隆盛先生が書いてくださった「田上小学」という門札が残されている。私たちにとって西郷隆盛は特別な存在で、大河ドラマ「西郷どん」は家族で楽しみにしている。このドラマの中に、私がそれまであまり知らなかった、とても気になる人物が出てきた。天璋院篤姫だ。ちょうど私が生まれた翌年に「篤姫」という大河ドラマがあったそうだ。「『西郷どん』に出てくる篤姫と、『篤姫』でえがかれた天璋院とは、ちょっとちがうよ。」という母の言葉が気になり、自分で調べてみることにした。

篤姫は、1836年2月5日、今和泉島津家の長女として生まれた。幼名は一と書いてかつそれから市、いどこにあたる島津斉彬の養女になった時に、源篤子と名前が変わっている。とても健康で、かしこい子だったことを認められて、徳川家定の正室となるために江戸へ行った。家定は結こんから2年たたないうちに急死、たよりにしていた養父の斉彬も死去してしまう。ところが篤姫は薩摩に帰ることなく、江戸城の引き渡し後も49才で亡くなるまで東京でくらししている。

私が篤姫をすごい人だと思うのには、三つの理由がある。一つ目は、自分の生まれ育った家を出て、薩摩藩のために斉彬の養女になったことだ。さびしい気持ちや不安な気持ちはきっとあったはずなのに、勇気のある人だと思う。分家の娘が徳川家にとつぐためには、よほどのかくごがあったのだろうと思う。私にはこんな決断をすることはできない。

二つ目は、一度決めたことは最後までやりとげる生き方だ。夫の家定が亡くなった時、薩摩と徳川幕府が敵対した時、江戸城から出た時と三回は薩摩に帰ろうと思えば帰れたのにそうしなかった。私は、最初篤姫は薩摩のことがきらいになったのかと思ったけれど、そうではないことが分かった。なぜなら大奥に入った後も薩摩の麦みそやびわ、竜眼のはちみつ漬けなどをなつかしんで食べていたと書いてあったからだ。故郷を思いながらも徳川家のために生きぬいた強さが、勝海舟に「烈女」と言わせるほどだったのだなと思った。

三つ目は、その優しさだ。勇気のある強い女性だった篤姫は思いやりと優しさも持った人だった。江戸城から立ち退く時には、大奥にいた人たちの生活が困らないように一人一人に気を配ったという。篤姫のそう儀の際には浴道に一万人もの人々が集まったそうだから、どれほどしたわられていたか分かった。真の優しさを持った人だったのだと思う。

江戸から明治へ大きく時代が変わる時、天璋院篤姫は自分の意志で徳川家の人間として生きぬいた。「薩摩おごじょ」とは、強さと信念と優しさを持った篤姫のような人のことを言うのだろうと思う。私もいつか本物の薩摩おごじょになりたいと考えている。

優
秀
賞



薩摩川内市立 里小学校 六年

山下 煌生

「ぼくの維新プロジェクト」

「維新」全てのやり方が新しくなること。今年、明治維新150周年ということで、この言葉をよく耳にする。「維新」という言葉は、なぜかぼくの気持ちを高ぶらせる。それはきっと、大好きな郷土の先人、西郷隆盛が、明治という新しい時代を切り開いた興奮を、思い出させる言葉だからにちがいない。

ぼくが、西郷隆盛を尊敬する理由は二つある。一つは、信念をつらぬく強い意志があることだ。薩摩と長州という敵対していた二つの藩が同盟を結ぶということは、誰もが不可能だと考えた。しかし隆盛は、その不可能を可能にした。薩長同盟は、古い幕府を倒し、外国からの攻めきにも太刀打ちできる、強く新しい日本にしたいという、西郷隆盛の信念が成し上げた大業なのである。相手が誰であろうと臆することなく意見を述べ、信念をつらぬく強い精神力に、ぼくはあこがれる。

理由の二つ目は、優しさだ。自分にも周りの人にもうそがない。敵味方に関係なく、まごころで接する西郷隆盛だから、どんな人にもしたわれるのだ。江戸城の無血開城を成し上げたのも、江戸で戦いになれば、多くの民が苦しむので、むだな血を流させたくないという思いからである。西郷隆盛はいつでも弱い立場の人の味方である。その強く優しいという二つの全く反対のよさを持つ西郷隆盛は、人を説得する力にも優れている。隆盛の人や国につくす生き方は、敬天愛人が座右の銘であったことからわかる。天を敬い人々を愛し、大切にすることを、つらぬき通した西郷隆盛のような生き方を、自分もしたいと思う反面、決してまねできないとも思う。ぼくは相手にどう思われるかを気にするあまり、友達に言いたいことが言えない。心に思いうかんだ言葉をいつも飲みこんでしまうのだ。でも、それではいけない、正しいと思ったことは、きちんと相手に伝えたいと思う。

ぼくの維新プロジェクト。それは、教師になる夢をかなえるために、新しい自分を創り出すことだ。強く優しい人になりたいと思う。西郷隆盛が、人々に信頼されたように、ぼくも生徒や親に信頼される教師になりたい。「負けるな・うそを言うな・弱いものをいじめな」という、西郷隆盛が受けた郷中教育のきまりの中にそのヒントがあると思う。まず、誠実な人になりたい。自分自身にも、周りの人にも正直な心で、思いやりの心を持って接することで、隆盛のように信頼されると思うのだ。自分に負けない、強い精神も持ちたい。今、勉強と陸上の練習の両立は大変だ。しかし、常に目標を持ち、精いっぱい努力することで、隆盛のように、つらいことや困難なことに負けない精神力が育っていくのだ。

ぼくは変わる。新しい自分に。隆盛のような優しく信頼される人になる。これから先も、迷いくじけそうな時は、西郷隆盛を思い出す。ぼくの人生の師として尊敬し続けていきたい。



奄美市立名瀬中学校 一年

赤井 洸太

「現代から見た
西郷さん」

西郷隆盛・・・この名前から、あなたは何を連想するだろうか。明治維新、征韓論、西南戦争...
ここまでたくさんの人に影響を与えたのは、西郷さんだけであろう。

今年の夏、僕は長崎県島原市から奄美大島へ引っ越してきた。親が奄美大島出身だったこともあり、NHK大河ドラマ「西郷どん」を長崎にいたときから見ていて、興味をもっていた。奄美市の名瀬中学校に転校して早々、文化祭で奄美大島の「黒糖地獄」の劇をやり、なぜ西郷さんが奄美の地でも慕われているのかを詳しく知ることができた。僕は、西郷さんについて調べていくうちに、もっと西郷さんのことが好きになった。そして、気づいたことがあった。

一つ目は、歴史上の人物で西郷さん以外に「さん」付けで呼ばれている人はほとんどいないということだ。教科書に載っているような偉人たちでもみんな呼び捨てにされている。しかし、大河ドラマも「西郷どん」と、鹿児島弁の敬称が付いている。この違いは、やはり人気の違いだと思う。

なぜ僕が西郷さんのことを好きなのかと言えば、「ヒーローみたい」だからだ。僕にとってヒーローとは、ピンチに現れ、弱い者の味方をする。まさに西郷さんは、混迷期の幕末に現れ、日本を救ったヒーローなのだ。自分の置かれた立場が変わると、人が変わったようになってしまうことがある。でも、西郷さんは変わらなかった。下級武士の身分でも、流罪にされても、新政府の重役を担うようになっても。西南戦争で、西郷さんは天皇に刃を向けたとして、賊軍扱いされた。でも、西郷さんのことを悪く言う人がおらず、むしろ天皇のおひぎ元の東京の上野に「江戸を戦火から守った人物」として銅像が建てられたことは、西郷さんの人気を物語っている。

二つ目は、西郷さんが悲劇の最期を遂げた西南戦争になぜ「戦争」の二文字が付いているのかということだ。普通、戦争とは、対等な国や組織同士が行うイメージがあるが、西南戦争では日本政府対薩摩士族であり、その差は歴然としており、対等とは言えない。幕末に国内で「戦争」と呼ばれるものとしては、戊辰戦争があるが、これは旧幕府と新政府が戦ったため、対等と言える。国内の反乱は、江藤新平が起こした佐賀の乱や江戸時代の大塩平八郎による大塩の乱があるが、いずれも戦争と言えるほどの規模ではない。つまり、西郷さんを慕う人がとても多く、各地で協力する人もいて、軍勢の規模が拡大し、長期化したため、「戦争」と呼ばれるほどのものになったのである。西郷さんにヒーローとしてのイメージがあったために、政府を相手に勝算なき戦いを繰り広げ、最期には自ら命を絶つという結末を迎えてしまった。自らを犠牲にしてでも弱き者の味方である、まさにヒーローそのものなのだ。

つまり、西郷さんが死後140年以上経った今でも親しみを込めて語り継がれているのは、「人としてどうあるべきかを先頭に立って、たくさんの人に教えてくれた」からだと思う。だからこそ、これから先も西郷さんは愛されるであろうし、西郷さんのような生き方を目指していくことには、大きな価値があるのではないだろうか。

それに比べて、今の世の中はどうだろう。高齢化が進み、次の時代を担う若者は減少している。また、社会や政治を見れば、「忖度」や言っていることとやっていることが違う人たちがたくさんいる。嘆きたいのはやまやまだが、今の僕たちに求められていることは一つだ。それは、「人として何が大切かを明らかにして生きる」ということだ。西郷さんは、これを示してくれたと思う。西郷さんのように、人として恥ずかしくない生き方を僕もしていき、この激動の社会を生き抜いていきたい。

優
秀
賞



志布志市立 伊崎田中学校 二年

野村 大和

「先人たちの歴史」

僕は、歴史が大好きだ。特に、幕末の頃だ。この頃は激動の時代でたくさんの偉人が活躍した。そのなかで最も尊敬するのは、「維新の三傑」の一人である大久保利通だ。そんな偉業を成し遂げた人なのに、なぜかたくさんの人から憎まれている。なぜ、大久保利通はたくさんの人から憎まれているのか、ということに興味を持った。

彼は、1830年生まれ、薩摩出身の下級武士で、木戸孝允、西郷隆盛らと協力して倒幕を成し遂げ、新しい日本を作った張本人である。しかし、倒幕後、西郷隆盛と対立し、西南戦争で戦った。最後は、馬車で皇居へ向かう途中東京の紀尾井坂で暗殺された。これが彼の人生である。

彼がしたことといえば、岩倉使節団の一員として諸外国を巡り、条約改正の交渉を行ったこと、日本の政治の基盤を作ったこと、洋風文化をいち早く取り入れたことなどだ。今の日本の政治があるのは、彼が努力したおかげだと思う。僕は、今から100年以上前に作られたものが今の日本の基盤となっているなんてすごいと思った。また、外国の文化を取り入れた食や、服装も彼が関係しているとは知らなかった。

さて、彼がなぜ憎まれているのか、それは西郷を死に追いやった張本人だからだ。考え方の違いで、薩摩の英雄だった西郷を追いつめた。いろんな人から好かれていた西郷を殺すということは、たくさんの人に嫌われるということだ。だから、彼は暗殺された。しかし、僕はそこまで彼にする必要はなかったと思う。暗殺されていなかったら日本は、もっと発展していたはずだ。彼は、西郷と対立しているが、本当にすごい人でいろんなことを成し遂げた能力の高い人だった。だから、僕が伝えたいことは彼をもっと評価してほしいということだ。

西郷と大久保が、対立しないといけなかったのは確かに考え方の違いということもあったと思う。だけど、理由はそれだけではないと思う。薩摩と長州は、同盟を組んだとき武力で幕府を倒すことを目指し、戊辰戦争を通し新しい国づくりを始めた。その後、武士は特権を失ったことで、反乱を起こした。西郷は、武士たちの思いを一人胸に秘め、その矛先を朝鮮へ向けた。いわゆる征韓論である。しかし、この論争で大久保に敗れた西郷は政府を去り、鹿児島に戻った。武士の思いを汲んだ西郷。理想とする国づくりに対し、友に対しても非情になった大久保。この二人の決着は、西南戦争でついた。もしこのとおりだったら、これからの日本を考えて武士たちの怒りをしずめるために命をはった西郷、大切な友だから殺したくないが、これからの日本のために戦った大久保。この二人の判断力はものすごいものだと思う。

今年、学校で西郷どんの劇をした。薩長同盟が組まれるまでには、たくさん話し合いがあり、それぞれの思いが一つになったんだなあと思った。同盟が組まれるシーンは、やっぱりかっこいいなと思ってしまった。

彼らは、江戸から遠く離れたこの鹿児島から多くの偉業を成し遂げた。僕たちも都会でなく田舎に住んでいるが、彼らのように遠く離れていても発信していくことができるはずだ。

僕も、鹿児島から偉業を成し遂げた薩摩の英雄のようになりたい。

僕の尊敬する大久保は、留学や勉強をし、新しいことをたくさん取り入れ日本をつくってきた。僕も彼のようにたくさんのかたちを成し遂げ、生徒会長としてすばらしい学校をつくっていきたい。

優
秀
賞

西郷隆盛先生手洗い鉢



始良市立 重富中学校 三年

藤崎 琴子

「『西郷どん』に学ぶ」

明治維新150周年を迎えた今、私が明治維新に触れる機会と言え毎週日曜日の大河ドラマ『西郷どん』を視聴することだ。最初は家族が見ていたのを一緒になってなんとなく眺めていたのだが、いつの間にかそのストーリーに惹かれ毎週欠かさず見るようになっていた。

やはり主人公の西郷隆盛(せごどん)には人として見習うべきところが多くあり、毎週学びの時間である。

まず西郷どんは、ぶれない信念をもっている。そこに憧れた。ドラマでも倒幕という目標に向かって自分の周囲の人々の考えを自分の力で変えていく姿が描かれている。その中で幼なじみでもある大久保利通に「もう、お前にはついていけん。」と言われるシーンがあった。このように目標到達のためには、険しい道のりもあったはずだ。しかし困難を乗り越えることができたのは、「絶対にこの世の中を変える」という西郷どんの信念がぶれなかったからだ。そしてそのために最善を尽くしたからだろう。

私は、吹奏楽部に所属していて音楽に携わる中で「上手になりたい」という目標がぶれないようにしたいと思っている。少しの失敗や困難で諦めないで毎日の練習で自分のベストを尽くすこと。それが、目標達成につながるのだということを知ることができた。

しかし、7月に行われた夏の吹奏楽コンクールでのことだ。トランペットのソロを担当した私は、この日の成功に向けて日々の努力を精一杯して臨んだのだがミスをしてしまった。演奏直後は部の仲間顔を見たくなかったし、楽器も吹きたくなくなった。失敗に落ち込み、できなかった自分から逃げていたのだ。弱い自分に向き合えなかった私。自分に負けそうな私だった。

でも「こんな私を西郷どんが見ていたら、どう言うだろう。」とふと考えた。
「気張ってたもんせ。そげなことめめめするな。強くなれ。」

そう言って励ましてくれるかもしれない。そう想像すると力がわいてきた。自分の弱さに目を背けず、西郷どんのように物事を自分で動かそうという強い気持ちを持ちたい。

また、自分を犠牲にしても他人の幸せを思いやる西郷どんの心。そこに私は心を動かされた。自分の食料を貧しい人々に分ける姿や、夢を語る時に何度も口にする「民のために」という言葉。西郷どんの言動に当時も多くの人々が心を動かされたのではないかと。そして多くの人から慕われる存在となったのではないだろうか。

西郷どんは、様々な人との関わりの中で、どんな人にも対等に接していた。相手の立場によって自分の態度や意見を変えたりしない。誰にでも熱意をもって自分の意見をぶつけていく。そして感謝の言葉や反省の念を、相手が誰であっても誠意をもって伝えられるのだ。本当に素晴らしいと思う。

普通の人には、相手と自分の立場の違いなどによって行動を変えてしまったり、決めてしまったりするだろう。だから、「ありがとう」や「ごめんなさい」を素直に言えないこともある。私の場合はどうだろう、と自分を省みる。最上級生として活動する上で後輩たちと対等に、そして相手を尊重してつきあっているか。感謝や反省の弁も必要な時に相手を選ばず素直に伝えられる人でありたい。

私はこれからも吹奏楽部員として楽器を演奏し続けたいと思っている。また、3月には高校受験に臨む。今後も自分自身が逆風に吹かれ、できない自分と向き合わざるを得ない時がやってくるだろう。その時に西郷どんの生き様に学んだように自分自身の夢や目標を見失わず、周囲の人を大切にして強い信念をもって行動する人でありたいと思う。

● テーマ

大きな人間になろう！
～西郷さんの人間力に学ぶ～

● 講師紹介

・ 齋藤 孝 先生（明治大学教授）

1960年静岡生まれ。

東京大学法学部卒。同大学院教育学研究科博士課程を経て現職。

『声に出して読みたい日本語』が260万部のベストセラーになり日本語ブームをつくった。

NHK Eテレ「にほんごであそぼ」総合指導。著書に『読書力』『こども西郷どん』等多数。著書累計出版部数は1000万部を超える。



MBCユースオーケストラ

[演奏曲目]

運命の力(ヴェルディ)

ハンガリー舞曲第5番(ブラームス)

大河ドラマ「西郷どん」のテーマ



「運命の力」は、1862年、生麦事件の年に作曲されました。

この生麦事件がきっかけとなって、翌1863年に薩摩藩とイギリスの間で薩英戦争が起きました。

この薩英戦争によって、薩摩藩は西欧諸国の力を改めて知ることとなり、薩英戦争の2年後の1865年にいちき串木野市の羽島から19名の若者をイギリスへと派遣しました。薩摩藩英国留学生の派遣です。



県では明治維新150年という記念すべき年に、県内高校生15名を薩摩スチューデント派遣事業としてイギリスに派遣しました。

今日はその中から2名の高校生に、イギリスへの派遣を経た現在、どのような夢を描き、どのような未来へ進もうとしているのかメッセージをいただきます。



【ラ・サール学園高等学校 1年 新納 草太】

今から150年以上も前、命懸けで海を渡り、日本の近代化に尽くした先人たちの後を追ひ、私たち「薩摩スチューデント」はイギリスに行きました。初めて外国に行った私にとって、肌で感じた「異文化」はとても新鮮なものでした。日本での「当たり前」がイギリスでは通用せず、これまで日本で培ってきた自分の価値観を大きく揺さぶられました。その時気付いたのです、今までの自分の視野は「日本」という枠の中に留まっていたんだ

など。今回のイギリスでの経験は、グローバル化が進むこれからの世界でいかに生きるべきか教えてくれました。様々な文化がぶつかり合い、新たな価値基準が生まれては消えていく社会で、既存の価値観に固執し、新しい価値に排他的な態度をとることで一種の安心感は得られるかもしれませんが、しかし、それで社会は進歩するのでしょうか。「流れる水も澱めば腐る」という言葉が表すように、「停滞」は「後退」とニアリーイコールです。むしろ私は、グローバル化がもたらしてくれた新たな可能性に挑戦したいと思います。

私は将来、MLBの球団経営者を目指しています。日本でもMLBを身近に感じる機会が増えてきている中、アメリカのベースボールに魅了されたのです。最終的には、アメリカでの経験を日本に還元し、野球界に新たな風を吹かせます。この途方も無い目標には、沢山の困難が待ち受けていることでしょう。しかし、私は、日本の将来のために幾多の試練をも乗り越えた先人の情熱に学ぶことができます。Think globally, act locally. 世界に目を向け、自分の目標に向かって勇気を持って一步一步進んで行きたいと強く思います。



【鹿児島玉龍高等学校 1年 富松 菜々子】

「未来」この言葉を聞いて皆さんはどんなことを思い浮かべますか。私はふと、小学校の時に読んで心に残った、ある詩を思い出しました。谷川俊太郎さんの「未来へ」という詩の最後のフレーズです。

未だ来ないものを人は待ちながら創っていく
誰もきみに未来を贈ることはできない
何故ならきみが未来だから

4年も前に出会った詩を4年経って声に出して読んだとき、なぜか涙がこぼれました。私の心の中にたまった将来に対する漠然とした不安やモヤモヤした気持ちが優しく光に照らされたような、そんな感覚でした。

「将来何になる?」「どこの大学に行く?」「そのためにはどれくらいの勉強が必要?」あれもやらなきゃ。これもやらなきゃ。気付いたら明日に対する不安でもうすでに胸がいっぱいになっていたのかもしれない。

でも、自分が思っているよりもずっと世界は広い、このことに改めて気付かせてくれたのが薩摩スチューデントとして訪れたイギリスでの体験です。知らない習慣、知らない言葉、知らなかった職業、新しい価値観やものの見方、人との出会い。何百年もの歴史を持つ遺産に思いを馳せ、自分がどれほどちっぽけかを思い知りました。

まだ確かな将来像が描けている訳ではありません。不安も大きい。でも、だからこそ私たちには無限の可能性が秘められているのではないのでしょうか。私は創っていきたい。私自身の未来を、この手で。

概要

鹿児島県ゆかりの著名人が、郷土鹿児島への想いをベースに、鹿児島の若者へのエールとなるメッセージ映像を届けてくださいました。

メッセージをくださった方々

- ・ 桜庭 ななみ さん（女優・かごしま明治維新博PR大使）
- ・ 迫田 さおり さん（元バレーボール日本代表）
- ・ 勝 みなみ さん（プロゴルファー）
- ・ 上白石 萌音 さん（女優）
- ・ 大迫 勇也 さん（プロサッカー選手）